



Title	マイノリティが開発と遭遇するということ：「もう、開発は腹いっぱい」を考えるための序論として
Author(s)	崔, 博憲
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2002, 36, p. 1-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56515
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マイノリティが開発と遭遇するということ —「もう、開発は腹いっぱい」を考えるための序論として—

崔 博 憲

植民地化は、軍隊による制圧と警察制度に依拠して行われた後に、
慈善事業をとおして己れの存在を正当化し、
その永続性を合法化しようとする¹⁾

・はじめに

これまで開発なるものは、社会の問題を解決、改善するものとして考えられてきたが、同時に開発が語られる場には、開発する側が開発される側の遅れを測定しようとする思考、意思、ヴィジョンが内在する。この思考、意思、ヴィジョンは進歩という概念によって後ろ盾を得ている。R・ウィリアムズは進歩という言葉を「説得させる用語」²⁾であるとしているが、この進歩思想の変奏体として、開発も「説得させる用語」のひとつであるといえる。

実際、開発の実践対象は、ほぼ無前提に解決されなければならない事態として設定されているため、ほとんどの場合どのようにして技術的かつ合理的に実践するかという方法論的視点からそれは議論される。こうした視点からは、例えば開発Aに対して批判がなされた場合には、開発Bが代替案として提示されるという具合に展開し、開発そのものは問われない。

しかし、開発においてなされるのは、技術性、合理性の追求だけではな

い。開発とは、Arturo Escobar が述べるように、史的に特異な経験であり、知、権力、主体の形成と深く結びついたものである³⁾。

近代における国民としての「われわれ」の形成は、その「他者」像を国境の外のみならず、国境の内においても必然としてきた。そこでは「他者」は有徴、「われわれ」は無徴となり、両者に対して異なる法、記述、視線が用いられる。そして、徴を与えられた人々が分類されるカテゴリーには、マイノリティという指定席があてがわれる。国民国家化は、つねに、それ自身が継続するために未完でなければならず、マイノリティは国民国家化が未完であることを示す証とされる。特に開発という文脈においては、マイノリティは、時に十全な国民となるため、時に個性を発揮するために、その有徴性を問われ「より開発されなければならない存在」とされる。

こうした点から、開発が謳われる場は、発展や豊かさへの階段としてではなく、他者やマイノリティを名づけ、理解するプロセスとしても考えられなければならない。同時に問題化されるべきは、そこで名づけと理解の対象とされた人びとが、かかる開発に対して、どのような応答をしているのかということである。E・サイードは、「オリエントをめぐる著作家たちのことごとくが、オリエントを、西洋人によって注目され、再建され、さらには救済される必要のある地方とみなしていた」⁴⁾ と述べている。だが、オリエンタリズム的契機が、東洋—西洋という枠組みにのみ生起するのではないかと同様に、開発における名づけと理解も東洋—西洋、南—北という枠組みだけではなく、「支配の様式」として、それぞれの社会そのものに内面化されており、その内面化が議論されなければならない。

こうした問題関心から、以下の小稿では、開発という代物を技術的、合理的地点からではなく、名づけと理解の企図としてとらえ、その企図が展開する最中で、マイノリティと名指される人びとが、どのような存在としてありうるのかという議論を行うための予備的作業を行う。具体的には、

タイにおけるマイノリティである山岳民族の人びとと開発の関係に言及することになる。以前、タイの山の友人が発した一言が、マイノリティと開発の交差を考えるそもそもものきっかけになっている。その一言とは、「もう、開発は腹いっぱい」というものであった。それは、あるNGOが友人の暮らす山の村で、開発プロジェクトを実施するための簡単な調査を終えて帰っていった直後のことであった。だが一方で、その友人はしばしば、山の人びとの抱える問題の解決や是正するために開発の必要を語っていた。

マイノリティである彼／女らの開発へのこうした態度とは、いかなることなのであろうか。

・「内なる他者」としての山岳民族

テッサ・モーリス＝鈴木は、オホーツク海域の先住民族社会とその歴史を論じるなかで、民族誌について述べている。

民族誌学のまなざしはけっして無垢ではない。「新奇」な人びとに出会う探検家や人類学者は、見慣れない光景や感覚、汚れない現実の記録に、全身全霊で曝されていると感じるかもしれない。しかし実際には、その視界の拡がりや焦点はつねに、以前に（特定の同じ国ではないとしても）すぐなくとも似てはいる地域に足を踏み入れた者たちが遺した記憶によって枠づけられている。先行者の発見をあらためて論証したり、それに反駁したりしようとすると、それだけで、いわゆる「外なるもの」the foreign や「野蛮」the savage の性質を理解するためのイメージ、カテゴリー、問いの貯蔵庫を築きあげるのに、ある役割を果たしてしまう。そして同時に、こうした貯蔵庫をたずさえて、自己、国民、公民を想像するための境界線を地図化するのに一役買ってしまう。

こうして生み出されたイメージや設定される境界線は、官僚層による同

化や排除、開発や差別といった一連の政策形成の基盤となるので、きわめて現実的な効果をもつ。さらに踏み込んでいうと、このイメージや境界線が創出する枠組みは、先住民族の過去にかかるわたしたちの見方を現在にいたるまでなお形づくり拘束しつづけている⁵⁾。

この認識は、タイという国民国家が地理的、空間的、時制的に地図化されてきたという議論を展開する Thongchai が、19世紀後半から20世紀初頭の民族誌的知を問題化する主張と重なるだろう。

民族誌とは、あるアイデンティティの徵に照らし合わせて、人びとを同定し、差異化を探求するための調査であり、知識である。民族誌研究の歴史が示すのは、それが、生物学、言語学、文化人類学などの多種多様な知識や科学によって決定されていたということである⁶⁾。

Thongchai は、こうした民族誌的知の生産が植民地主義の一部であったとした上で、西洋植民地主義と「平行して」、タイの支配者たち自身が、領域内に暮らす人びと（臣民-Subject）との権力関係の再構築を行っていることに注目している⁷⁾。Thongchai はそれを「内なる他者への企図（project on Other Within）」と呼ぶ。内なる他者は「野性的他者（Wild Others）—— Khon Paa（タイ語で「森の人」）—— と、従順な他者（Docile Others）—— Khon Bannok（タイ語で「郊外の人」）に分割され、バンコクという位置から測られた差異を与えられ、前者への差異は決定的なものとして、後者への差異は微妙なものとして描かれる。Thongchai は、従順な他者であった郊外の人は、「タイ人」の一部を構成するものとなつたが、現在のタイという地理的—民族的—身体（Thai Geo—ethno—body）において周辺化されているのは、「野性的他者」の系譜に位置づけられる山岳民族であると指摘している。

「内なる他者への企図」によって、決定的差異を見出されつづけている山岳民族とは、主に北部タイの山岳地帯に暮らす人びとであり、タイ系民族が9割以上を占めるタイという国家のなかで、彼／女らは圧倒的な少数者として位置づけられている。彼／女らのなかにはタイ系の人びとよりも以前からこの地に暮らしている人びともいるが、多くは19世紀後半以降、中国やビルマ、ラオスなどから徐々に南下をしてきた人びとである。

彼／女らは総称として、「チャオ・カオ (Chao Khao)」と呼ばれている。「山の民」を意味する「チャオ・カオ」という呼称は、通常の生活世界のなかでも用いられるが、その意味内容と使用法は、イギリスによるビルマ植民地期の山地に暮らす人びとへの呼称から援用され、タイでは1959年の中央山地民委員会設立以降、明確に統治／支配という意味を充填された用語でもある⁸⁾。

直接統治の初期に、お雇外国人である人類学者の Manndorff は、政府による山岳民族への関心の高まりを、「もはや、政府にとってこれらの山地民を、そのままにしておくことは不可能となった。伝統的に自給的生活であった国家の遠隔地部分に行政化と近代化が拡張するのは避けられない論理である」⁹⁾ とし、タイ社会が山岳民族社会と直接的な関与を持つことの必然性を述べている。以後、こうした直接的な関与は、開発という文脈で理解されていく。そこでは Thongchai が民族誌と呼んだもの、すなわち人類学、社会学、地域研究、農学、生物学、心理学、栄養学、軍事、ジャーナリストといった、あらゆる方面からの調査、研究によって、「チャオ・カオ」にかかわる知が生産される。ただし、それまでのかかわりと決定的に異なるのは、「内なる他者」としての山岳民族の存在に「問題」を見出し、それを「われわれの問題」として設定することで、開発という直接的な関与を正当化する点である。具体的には、山岳民族の生活に直接的に介入する、開発する側が根拠とした「われわれの問題」は基本的に、

「共産主義＝国家保安への脅威」、「麻薬」、「森林破壊」の3点であった。

「われわれの問題」を是正・解決するために、タイは世界中から援助をかき集め、1953年の国境警備警察（BPP）の設立以降、様々な山岳民族への開発が実施されることになる。山岳民族へのサーベイ、山岳民族定住化政策、麻薬吸引禁止法、移動開発ユニットの組織化、山岳民族福祉局の設立、山岳民族定住化促進活動、移動開発チームの組織化、山岳民族リサーチ・センター設置、仏教改宗プロジェクト、王室プロジェクト、欧米や日本からのODA事業やNGOによる様々な開発プロジェクトなどである。「世界中の農村共同体が傭むほどの金銭や開発実践」¹⁰⁾が、山岳民族の暮らす北部タイに投入されたのである。

継続する開発において、「われわれの問題」の元凶である山岳民族は、国民としての「タイ人」という基準から、「欠如」や「遅れ」が看取され、同時に敵であるのか味方であるのかという基準で眼差しが向け続けられている¹¹⁾。タイにおける開発政策は冷戦期に、共産主義の脅威を利用してたともとらえられるが¹²⁾、とりわけ山岳民族を対象にした開発は冷戦後も、力強く展開している。

山岳民族の開発事業に自ら開発者として関わってきたKen Kampeは、開発を文化という言葉で表現し、その文化を論じるなかで、山岳民族自身が徹底的に、開発への参加を拒否されてきたという事態を批判し、それが以下のような信条（Beliefs）によって支えられているとしている。

- ただひとつ真の開発とは経済開発である
- 被開発者の無知は当然である
- 開発のために、被開発者の理解は必要ではない
- 被開発者の依存は維持されなければならない
- 開発とは味方を得るために、開発者の利益のための道具である

——レトリックは活動より重要であり、量は質よりも重要である¹³⁾

そして、Kampeは、事態の深刻さを次のような言葉で表現する。

そう、われわれは彼／女らを必要としている…われわれのフィールドのための労働者 (labor) として、…観光客のためのマグネットとして、…外国からの援助の根拠として…、そして国家のセキュリティー／麻薬／環境の問題のスケープゴートとして。そう、彼／女らは利用できる資源であり、われわれはおいしい (mineral) 権利を持ち続けている。われわれはこれらの権利を確保し続けなければならない。そして、結果として、開発がわずかかであれ価値の荒廃を変えるのであれば、それでよい…¹⁴⁾

このタイ山岳民族の開発にかかる物言いは、全く的を射ている。山岳民族を開発するための根拠に対して、そうした前提そのものを問う有効な研究や対抗言説が幾多も生産されてきたにも関わらず、彼／女らを開発される対象や資源として、そして「内なる他者」として位置づけ、支配し榨取する構造がいかに強固であるかを、この声明は物語っている。山岳民族のような第四世界¹⁵⁾とも呼ばれる人びとと、開発を考えるひとつの出発点はここにあるだろう。

だが、<開発>とマイノリティを考える出発点は、そこだけだろうか。脱開発論が叫ばれながらも、依然として開発が展開している今、Kampeのような主張を聴きつつ、開発という代物が、どのような場であるのかも同時に議論されるべきなのではないだろうか。換言すれば、「内なる他者への企図」としての開発が、いかにして社会に内面化され、そしてその企図への山岳民族の人びとの応答とはいかなるものであるのかということの問題化である。

・開発とアカ —— NGOs、Missionary、Tradition

開発は政府や国家のみによって受容され、実施されているわけではない。開発という代物は、政府や国家のみならず、さまざまな人や組織が連関する場でもある。例えば、人類学者、宣教師、そして1980年代以降急速に、その立場の重要性が認知されてきた NGO などである。ここで取り上げるのは、国家とは異なる立場から開発を担う人や組織と山岳民族の関係の風景である。具体的には、山岳民族のなかでも主にアカの人びとと開発のかかわりについて言及する。

アカの人びとは主にタイ、中国南部、ビルマ、ラオス、ベトナムの山岳地帯に暮らしている。タイには19世紀から20世紀の変わり目に中国、ビルマ、ラオスからの移住が始まったとされているが¹⁶⁾、1960年代以降の東南アジア諸国の激しい変化が彼／女らの移住に拍車をかけ、その流れは国境が明確になってからも止まっていない¹⁷⁾。現在では、タイには少なくとも5万を超えるアカが居住するといわれている¹⁸⁾。これまで、彼／女らはそれぞれ村ごとに、他の山岳民族とともにモザイク状に散らばり、山岳地帯で主に陸稲やトウモロコシ、ケシをつくり、家畜を飼育するという生活を実践してきた。

開発政策や、山岳地帯の人口増、森林の減少などにより、彼／女らの生活世界は大きく変化している。例えば、開発の名の下に行われる、彼／女らの生活における米の生産の重要性を無視した換金作物の奨励、焼畑の全面的禁止、タイ人化を厳しくせまる学校教育などは、彼／女らに対して従来の生活世界の継続を困難にさせ、安価に労働や肉体を市場に提供するよう強いられている。また、アカは山岳民族のなかでも多くが、土地の所有権や市民権の欠如といった問題に直面し¹⁹⁾、「最も低開発」²⁰⁾とされる一方で、しばしば観光パンフレットやポスターの表紙を飾り、タイの重要な觀

光資源としての役割を担わされている。

これまでも他の山岳民族同様、アカも支配者であったイギリス、日本、ビルマ、また数世紀にわたって、地域のマジョリティである中国人、シャン人や北タイ人との不平等な関係を通して、幾多の変化を経験してきているが、近代国民国家の出現やそれとともに遭遇する開発は、彼／彼らの「生きられた」平地-山地関係に根本的な変化を要請している²¹⁾。

こうした情況において、タイのアカが、キリスト教に改宗した25周年記念（1987年）を祝う催しに参加したKammererは、興味深い場面に言及している。記念祭では、国内外からのキリスト教関係者や、宣教師、キリスト教に改宗した他の山岳民族、伝統的アカの人びとなどが招かれた。そこで行われた改宗を象徴的に表現する寸劇は、キリスト教に改宗したアカが、彼／彼らが伝統的に「背負ってきた」慣習（custom）やアカとしての生き方（Akha-way）であるザンを、「重く」、「古い」ものとして描き、そのザンを投げ捨て、笑いものにするというものであった。キリスト教のなかには、伝統的アカを、野蛮な異教徒（heathens）とラベル付け、彼／彼らの魂をデーモンやデビルとしてみなし、寸劇では彼／彼らを悪靈（evil spirits）からの解放が意味づけられたのである。Kammererはこの記念祭に招かれていた伝統的アカの若者が、寸劇と観衆の反応を目の当たりにした際に、彼が見せた「凍った表情」が、異なるアカ同士の関係の難しさを示していると述べている²²⁾。ここで表現されているアカ同士の不和（friction）は、彼／女たちと開発の現状のひとつを端的に表している。

山岳民族のなかでもアカを対象に活動する援助団体やNGOは比較的多い。活動対象をアカに絞ったNGOのなかでも、比較的規模が大きく、長期にわたる活動によってアカの社会に影響力を有する開発NGOがふたつある。ひとつは、1981年に設立されたDAPA（Development Agriculture and Education Project for Akha）である。DAPAは基本的に、キ

リスト教系の団体から活動資金を支援されて、主たる活動対象村はキリスト教に改宗したアカの村である。この NGO の設立には、アメリカ・バプティスト教会から宣教師として派遣され、1947年以降、ビルマやタイのアカやラフへの布教活動を行い、同時に、彼／女らを人類学的に研究し、また多くの彼／女らへの開発計画にも積極的に関わった Paul Lewis が大きく貢献した。もうひとつは、当初はローマン・カトリックの神父として派遣され、後に伝統的アカに改宗した、オランダの人類学者 Leo Alting von Geusau によって、1981年に設立された AFECT (Akha Association for Education and Culture in Thailand) である。ふたつの NGO は、欧米人やタイ人のスタッフ、ボランティアもいるが、基本的にはアカによって運営されている²³⁾。

このアカを対象にしたふたつの NGO を設立したそれぞれの欧米人は、非常に対照的である。一方は、キリスト教宣教師として、自ら「自分はまっとうな宣教師からはほど遠い」が、「アカという人びとに恋した者」²⁴⁾と自称する Paul Lewis²⁵⁾。もう一方は、アカの人びとのザンという精巧な慣習・生き方に魅せられ²⁶⁾、キリスト教の布教活動を批判する元宣教師である Leo Alting von Geusau。だが、両者にはいくつか、重要な共通項がある。方向性が異なるとはいえ、ともに、アカに対して開発を積極的に推進してきたという点。また、両者はともに、人類学者として、タイのアカ像なるものを形成することに多大な貢献してきたという点である。

そして、それぞれが設立した NGO は、二人の開発観、もしくはアカへの視点を基本的に受け継ぐことになる。Paul Lewis の設立した DAPA は、農業や教育面での援助などを通して、近代化アプローチと呼べる開発手法を行っていく²⁷⁾。一方、従属論なども視野にいれつつ、従来の開発の近代化アプローチは文化への配慮に欠けていると批判し、伝統的アカのザンなるものは、社会的変化に脆弱なものではなく、むしろ、変化におい

てこそ有効であり、かつそれに対応するものであるという視点から、伝統的アカの歴史的に構築されてきた「文化的経験」に基づいた開発の必要を諷う Leo Alting von Geusau。彼から影響を受けた AFFECT は、伝統を開発することで、現代のアカが直面する困難を克服しようとする²⁸⁾。

ここで、どちらの開発観やアプローチが優れているかということは問題ではない。ここで重要なのは、こうしたふたつの開発アプローチは、タイのアカの人びとと開発の関係のなかに、伝統を捨てキリスト教徒となつたアカと伝統を守るアカという境界を設定することに貢献したということである。そして、設立者と同じように、それぞれ開発ビジョンが異なる二つの NGO のアカへの取り組みにおいては、どこまでも開発が前提とされているといえる。

どちらの NGO の運営者や、その支持者にとって、重要なのは開発そのものではなく、どのような切り口から開発が展開する時空間のなかに、自らを位置づけるかであり、Kammerer が言及した記念祭での出来事は、そのような場におけるせめぎ合いのひとつである。だが、こうした事態が指し示しているのは、アカや「チャオ・カオ」と名づけられ、その名に意味を与えられた者たちにとっては、どのような場に自らを位置づけようとも、開発の外部はないということである。

・開発と交渉する

また、近年ではこうした伝統派とキリスト教派という区分を元に展開されるアカと開発の関係において、特に反キリスト教の声が大きくなっている。筆者が、伝統的アカの村に行った際に見かけた黒い T シャツには、以下のような言葉が大きくプリントされていた。

STUPID! JUST SAY “NO” TO MISSIONARIES

このTシャツは、「SAVE THE AKHA」を掲げ、激しく活動するアメリカ人によって作成されたものである。だが、Tシャツを着ていた村人自身は、それに記されている意味やメッセージは理解されていない。こうした植民地主義批判は、いったいいかなる事態を指し示しているのだろうか。

キリスト教の布教における歴史的、社会的行為を糾弾する活動は、近年ではインターネットなどを駆使して大きな影響力を有している²⁹⁾。そのような反キリスト教という視点から活動する彼／女らは、キリスト教へ改宗したアカへの対応は厳しい。そこでは、「伝統やザンを捨ててしまったアカは、もうすでにアカではない」、「伝統をまもるアカこそ本当のアカだ」という声が聞こえてくる。かつて、ザンを捨てたアカは、「こうもり」とみなされていたという³⁰⁾。乱暴にいってしまえば、現在の開発や救済という文脈においてアカは、「伝統的アカ——遅れたアカ」と「キリスト教に改宗したアカ——こうもりとなったアカ」という二分法が成り立ってしまっている。ここからでは、開発や救済という舞台でアカの人びとが演じることの意味は見出せず、植民地主義批判さえもがアカに対する二分法を再生産することに貢献してしまう。

では、このようにタイという国家のみならず、NGOや宣教師、人類学者、または救済を謳う者によって、開発との関係が設定されているなかで、山に暮らすアカの人びとはどのようにして、かかる事態の展開をとらえているのだろうか。

タイで最もアカが多く暮らすチェンライ県の県都から車で25分ほど走り、さほど高くない山の中腹にA集落はある。人口は200人足らずの小さな集落である。この村人は、以前は高地に暮らしていたが、行政からより低地

への移住が強制され、1993年から、この地に暮らしている。近隣の北タイ人や他の山岳民族の集落とともにひとつの行政村を形成している。このA集落の村人は行政職としての村長や村営委員、地区開発委員などに任命されている者はいない。国籍を有しているのは15人のみであり、この地区へ新しく移住してきたことや、同地区内の先住のアカの集落がキリスト教に改宗していることなどから、地区内での立場は弱くA集落としての対外的要要求を反映させることは難しいのである³¹⁾。また、移住の際なされた近隣の土地を田畠として利用することを認めるという約束は履行されず、村人の多くは先住者から賃借りや小作受けした、やせているわずかな畑を耕している。農地として十分に利用できる畑がなく、米をはじめとして、自給用・換金用の作物が不足し、それを補うために村人の多くは建設現場などの日雇いの仕事を行う。タイ語や北タイ語を理解する20代、30代はチェンマイ、バンコクといった大都市へ出て行く者もあり、なかには多額の借金をして国外へ出稼ぎに行く者もいる³²⁾。こうしたなか、A集落の村人は、「政府や役所の開発はわれわれに恩恵を与えてくれない」とし、政府／行政とは異なる開発へのチャンネルの重要性を述べる。

A集落はキリスト教への改宗をしておらず、いわゆる伝統的慣習を維持しており、前述のNGO、AFECTの活動対象村である。具体的にはAFECTは、この村で行われる伝統的慣習行事への支援を行い、欧米からのスタディ・ツアーやもしくはボランティア・ツアーワークの一部をこの村に定期的に招くなどして、アカの伝統的慣習の維持・促進に努めている。村の広場には、AFECTによって作成された「アカの人民は従来の文化を追求する：宗教の布教を禁ず」とタイ語で書かれた赤い看板が掲げられている。その看板のすぐ横にはDAPAによってつくられた白い看板がある。そこにはタイ語で、この地に移住する際に、田畠の利用を認めるという契約があったことが書かれており、暗に行政側が村人との契約を反古にしたこと

が訴えられている。またDAPAはこれまで、この村の水不足解消のための施設の提供を行っている。DAPAは近年、従来の農業・教育支援という活動以外に、いわゆるエコ・ツーリズムを掲げるツアーを主催するようになり、A集落は、そのツアーの受け入れ村となっている。ツアーは主に欧米からの観光客をアカの村に案内し、アカの生活と自然環境の調和を理解してもらうという趣旨なのだが、その際、ツアーヴーとして選定されるのはDAPAが、活動の中心にしてきたキリスト教へ改宗した村ではなく、観光客が期待するアカらしいアカであるA集落のような伝統的村が多い³³⁾。

また、A集落は1998年以降、Mirror Art Groupという「社会変化、人権と普遍的平等の促進」³⁴⁾を目的とするバンコクから活動拠点を移してきたNGOの活動対象地域に含まれることになり、村人は、国籍取得や麻薬更生などのための支援を受けるようになる。

このように、AFECTやDAPAという異なる開発観をもつふたつのNGOだけではなく、それ以外のNGOとも関係をもつA集落は「政府や行政の開発はわれわれに恩恵を与えてくれない」という情況において、その場その場に応じて、自らに関心をもつNGOと交渉し支援を引き出している。村のリーダーであるC氏は、それぞれのNGOの特徴を十分に理解して「村にとって、伝統や文化維持のためにAFECTは重要だ。DAPAもキリスト教をひけらかさなければ、彼らの連れてくる観光客は村にとって経済的に助かる。また、国籍や権利に関する問題は、Mirror Art Groupが力になってくれる」とした上で、「遅れていると思われようが、珍しいと思われようが、開発でも観光でも何でも、利用されながら、こっちも使わなくちゃならない」と語る³⁵⁾。

アカの＜開発＞を設定する伝統一近代という二分法から、このような語りの意味を理解することは難しい。キリスト教に改宗したことによって、

伝統的アカの「背負って」きたさまざまなアカとしての生き方・あり方を見下すという構図と、キリスト教へと改宗したアカを「本物のアカ」ではないとする構図は、近代という時空間のなかではコインの裏表である。アカという名そのものの内包する多様性や、そこに充填される意味や実践が、他者によって形づくられているのである。このコインは、クリフォードが述べた「ローカルな過去かグローバルな未来」³⁶⁾ という図式を、人類学者や開発者、キリスト教、反キリスト教を触媒にして、アカの人びと自身にも内面化させている。そのようなコインの原材料こそを植民地主義と呼ぶべきだろう³⁷⁾。

だが、そのコインを舞台に、アカや山岳民族のような人びとは生を更新しているのである。古谷嘉章がガルシア＝カンクリーニを引用しながら、ブラジルのインディオが生き残りのために実践する、ヴィデオカメラを用いて、「伝統的に好戦的なインディオ」を演出するカヤポーの実践を、「近代への別の入り方」としているが³⁸⁾、こうしたアカの人びとが実践する開発における位置どりも、そのようなものとして考えられなければならぬ。

・開発のなかで

タイの山々に生きる人びとも、「近代への別の入り方」を実践しているといえる。そして、どのような入口であろうと近代への入口は、彼／女たちのような人びとを、避けがたく開発とのかかわりにおいて設定する。言い換えると、開発というフィルターを通して、彼／女らと出会うことは、かぎりなく難しい。彼／女らは、つねにすでに開発によって解決されるべき問題とともに／として設定され、表象されているのである。

近代という時空間のなかで、マイノリティとして生きる彼／女らと開発を必然的に、かかわらせてしまうような事態は、かつて土屋健治がインド

ネシアのカルティニが描く風景について述べたことに通底するのではないのだろうか。

オランダ語という新しい言語世界を獲得することと、「自然」の美しさを発見することが同一であるという構造が成立しているだろう³⁹⁾

土屋は、カルティニがオランダ語を獲得することによって描くインドネシアにナショナリズムの創生期を見出し、それを著するにあたって「ある一つの観念や情念がどのようにして社会の成員に共有されていくのかを明らかにする」⁴⁰⁾ ものであると述べている。土屋にとって「ある一つの観念や情念」とはナショナリズムである。この「ある一つの観念や情念」を、ここでは、開発として考えることはできないだろうか⁴¹⁾。開発という世界においては、避けがたく山岳民族やアカを問題とともに／として発見し、また、そのようなものとして意味づけるという構造として。

山岳民族をさまざまな問題群の元凶や原因とする構図に対して、これまでに多くの研究者や山岳民族自身によって、根底的な疑義が提示されている⁴²⁾。こうした議論の展開は、森林破壊の元凶、国家の安全を脅かす者、麻薬の運び屋などの諸問題は、単に山岳民族をスケープゴートにするという論理の破綻を示している。だが、にもかかわらず、彼／女らは依然として「内なる他者」とされ続けている。こうした山岳民族を、暴力的に名づける背景には、Thongchai がいうように、国民国家というものが「内なる他者」を必要不可欠にしており⁴³⁾、それは国家のみならず国家を中心とした錯綜した関係のなかで、多種多様な知識や科学、運動などによって構築されているのである。

また、開発という制度が、常に開発者を開発者として、被開発者を開発者として再生産させているとする Kampe の主張は、美辞麗句にまみれた開発を再検討するためのひとつの出発点である。その出発点を看過する

ことはできない。しかし、それとは異なる開発とマイノリティの関係を問う出発点もありうるはずである。

富山一郎は沖縄における「基地と開発をめぐる交渉のプロセスを、いわゆる「アメとムチ」というように整理してしまわないでおこう」⁴⁴⁾ とし、その交渉（＝商談）について、次のように述べている。

商談の外部、いいかえれば、救済、復興、振興、開発という救済の法の外部にすぐさま身をおき、基地への抵抗の根拠を主張するのではなく、こうした商談へ参加すること、あるいは参加せざるを得ないということから話をはじめていきたい。「沖縄問題」と呼ばれる領域におけるさまざまな発話や名称を考察するには、こうした発話や名称が、まずもって救済の法の中の発話であり名称であるということを、批判的に問題化する必要があるのである⁴⁵⁾

また、山岳民族の存在が取り扱われる場は、富山が基地との交渉を強いられる沖縄を、「植民地でも国内でもなければ、そのどちらでもあるのだ」⁴⁶⁾ と表現するような場なのである。

開発という商談のなかにいる（もしくは、そのなかにしかいない）アカや山岳民族の人びとには、商談のルールは「むこう」からしかやってこない。そのルールや掟は厳格だ。第一級のタイ国民とならなければならぬ、進歩のために「古く」、「重い」伝統は投げ捨てなければならない、困難を克服するために伝統は守られなければならない、また観光のために、文化は守られなければならない、開発のためにアカの統一は強化されなければならない（統一したことがないにもかかわらず！）。

開発の交渉（＝商談）に参加せざるを得ないという場は、こうしたルールによってがんじがらめである。しかし、そこは山岳民族のような人びとにとっての主戦場なのである。この主戦場を思考する時、Leo Alting

von Geausau の次の言葉は重要だ。

どれほどアカが力強いかを思い出すことが重要だ。依然として、腐ってもいない文化の喪失をセンチメンタルに語る必要はない⁴⁷⁾。

だが、しかし、この言葉は、アカや山岳民族の伝統派／近代派、キリスト教派／反キリスト教派という二分法を強化するためにではなく、こうした二分法によってアカや山岳民族という存在を規定しようとする暴力に抗する彼／彼らの闘争として表現されるにふさわしい。

・むすびにかえて

開発が謳われる場は、他者を名づけ、理解するプロセスとして考えられなければならない。その名づけと理解は、Thongchai が民族誌と呼ぶものによってつくられ続ける。そしてそれと同時に、その場は、抵抗と闘争の場でもある。「もう、開発は腹いっぱい」という言葉は、そのような場において発せ語られているのである。語られながらも、開発は食いつづけなくてはならないものとして表現されているのだ。そして、アカや山岳民族のような人びとにとって自らの言葉にそのまま翻訳することのできない開発という代物との遭遇は、都合のよいマイノリティとして再生産されながらも、自らがアカや山岳民族であろうとするひとつの契機となる可能性を秘めている。

ただし、かかる事態をいかに記述するのかという問題は残されている。開発とマイノリティの交差を論じるなかで同時に考えなければならないものとして、山岳民族のような人びとの現在を、地域的、民族的に区切り、それを事例的に抽出して記述することの問題性を同時に考えないわけにはいかない。Daniel Mato は事例研究アプローチなるものは結果として、地域のエージェントではなく権力支配を実践するグローバル・エージェン

トをむしろ肥やすとして批判をしている⁴⁸⁾。このような方向に力を与えずに、どのようにして開発とマイノリティの交差を記述するのかという問い合わせへの応答は迫られている。そして、それは、開発のために、マイノリティのためにという地点から記述されるものではないかもしれない⁴⁹⁾。

註

- 1) ファノン・フランツ『革命の社会学』海老坂武訳 みすず書房 1969年 93頁。
- 2) レイモンド・ウィリアムズ『キーワード辞典』岡崎康一訳 晶文社 1980年 296頁。
- 3) Escobar, Arturo, *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World*, Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1995, p10.
- 4) エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』今沢紀子訳 平凡社 1986年 212頁。
- 5) テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める—アイヌが経験する近代』大川正彦訳 みすず書房 2000年 92-93頁。
- 6) Thongchai Winichakul, "The Other Within: Travel and Ethno-Spatial Differentiation of Siamese Subjects 1885-1910" in Andrew Tourton (ed.), *Civility and Savagery: Social Identity in Tai State*, Richmond, Surry: Curzon, 2000, p. 43.
- 7) Thongchai は Mary Louise Pratt (*Imperial eyes: travel writing and transculturation*, London: Routledge, 1992) が展開する「autoethnography」という概念によって、植民地化された人びとが、彼/女たち自身 (themselves) によって植民者のイディオムを引き受けてしまう」(pp. 7-9.) という議論に対して、自らの論点はその autoethnography の auto 及び themselves という語によって隠蔽されかねない、被植民者の内部の権力関係に自らの論点を置いていることを強調している。Ibid., p. 59.
- 8) 山岳民族と呼称に関しては、次を参照。Mckinnon, John, "Structural Assimilation and Consensus: Clearing Ground on Which to Rearrange our Thoughts" in Bernard Vienne and John Mckinnon (eds.), *Hill Tribe Today*, Bangkok: White Lotus Press, 1989, pp. 307-308. また、行

政（統治）上、「チャオ・カオ（Hill Tribe）」はアカ、モン、カレン、ヤオ、ラフ、リス、カムー、ルア、ティンの9つの民族に限定されており、高地に暮らす北タイ人、中国人、ビルマなどからの難民と認定された人びとは含まれない。

- 9) Manndorff, Hans, "The Hill Tribe Program of the Public Welfare Department, Ministry of Interior, Thailand: Research and Socio-Economic Development" in Peter Kunstadter (ed.), *Southeast Asian Tribes, Minorities, and Nations*, Princeton New Jersey: Princeton University Press, 1967, p. 530. なお、この人物が推薦し設立に至った山地民リサーチ・センターと反共政策の関係については、次を参照。Wakin, Eric, *Anthropology Goes to War: Professional Ethics & Counterinsurgency in Thailand*, Wisconsin: Center for Southeast Asian Studies University of Wisconsin, 1992.
- 10) Cooper, R. G, "The Tribal Minorities of Northern Thailand: Problem and Prospects" in *Southeast Asian Affairs* 6, 1979, p. 323.
- 11) 例えば、1998-9年にチェンマイのチョム・トン地区で起きた山岳民族と平地の北タイ人の衝突では、山岳民族を非難する根拠のひとつが、山岳民族が「タイ人ではない（Non-Thai）」というものであったことを想起する必要があるだろう。この点については、関連するものとして、次を参照。Larry Lohmann "Forest Cleansing: Racial Oppression in Scientific Nature Conservation" in *Corner House Briefing*, no.13, 1999.
- 12) 河森利之「サリット政権下の開発体制」岩崎育夫（編）『開発と政治—ASEAN諸国の開発体制』アジア経済研究所 1994年。
- 13) Kampe, Ken, "Development, Bureaucracy and Life on the Margins", in *Pacific Viewpoint*, Vol. 33: 2, 1992, p. 160.
- 14) *Ibid.*, p. 164.
- 15) Anthony Walker は、部族や先住民、エスニック・マイノリティという用語を避け、タイの山岳民族のように、いわゆる原住民ではない人びとも含み、かつ社会的にも文化的にも周辺に生きるマイノリティを呼ぶものとして、この用語を用いている。Walker, Anthony R, "From the Mountains and the Interiors: A Quarter of a Century of Research among Fourth World Peoples in Southeast Asia" in *Journal of Southeast Asian Studies*, Vol. 26: 2, 1995, p. 326.
- 16) Alting von Geusau, Leo, "Dialectic of Akhazang: The Interiorizations of a Perennial Minority Group" in John Mckinnon and Wanat

- Bhrusasri (eds.), *Highlander of Thailand*, Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1993, p. 246.
- 17) この流入の大きな要因として、ビルマの軍事政権によるマイノリティへの圧政がある。この点については例えば、次の参照。The Shan Human Rights Foundation, *DISPOSSESSED A report on forced relocation and extrajudicial killings in Shan State, Burma*, 1998.
- 18) 1996年時点でのタイ国内のアカは48,468人とする調査結果がある。Kumbunratana, Pracguap (ed), *Social Trend of Highland Communities in the Next Decade*, Chiangmai: Chiangmai University, 1996.
- 19) Renard, Ronald D, *Evaluation of Development Agriculture and Education Project for Akha*, ChiangMai: Payap University, 1995, p.6.
- 20) McCaskill, Don and Kampe, Ken (eds.), *Development or Domestication?: Indigenous People of Southeast Asia*, Bangkok: Silkworm Books, 1997.
- 21) Kammerer, Cornelia Ann, "Territorial Imperatives: Akha Ethnic Identity and Thailand's National Integration", in Bernard Vienne and John Mckinnon (eds.), *Hill Tribe Today*, Bangkok: White Lotus Press, 1989.
- 22) Kammerer, Cornelia Ann, "Discarding the Basket: The Reinterpretation of Tradition by Akha Christians of Northern Thailand" in *Journal of Southeast Asian Studies* 27, 2, 1996, pp. 320-330.
- 23) 現在は、ともに両者は自らが設立したNGOに直接的に関与はしていない。Pawl Lewisはアメリカに帰国。Leo Alting von Geausauはチェンマイに拠点を置く、主にアカの調査研究に主眼を置いたNGOにて活動。
- 24) これは、かつて Paul Lewis が行った山岳民族への家族計画プロジェクトへの批判が展開された Akha News Service の記事 (Sterilization and Blood Theft Perpetrated Against Akha People By American Baptist Missionary) への応答のなかでの表現である。
- 25) Kammerer は Paul Lewis の立場が、(伝統的アカを遅れた野蛮人として) キリスト教徒に「なる」ことを強調する記念祭の意図を望んでいなかったことを指摘している。Kammerer, Ibid., p. 330.
- 26) 稲村は、ザンを「アカ族が祖先から引き継いだ知識の総体」としている。稲村務、「アカ族・ハニ族・アイニ族—中国雲南省西双版納州における「アカ種族」の国民統合過程」『東南アジア—歴史と文化』25号61頁。
- 27) Paul Lewis の開発観については、例えば、以下を参照。Lewis, Pawl,

A Proposal for the Development of a Family Planning Program among the Akha of Thailand, Oregon: Department of Anthropology University of Oregon, 1973.

- 28) Alting von Geusau, Leo, *ibid.* 及び Alting von Geusau, Leo ““Culture and Development” What does this Mean in Relation to Mountain People?” in *Thai Cultural Newsletter*, Vol. VI, No.8, Bangkok: Office of the National Culture Commission, 1989. こうした Leo Alting von Geusau の著作から読み取れるのは、アカであることはすなわちアカ・ザンを背負っているとする立場である。それは、単にアカという名を有していることとは異なる。そこからは、キリスト教に改宗したアカが「アカであること」を実践していることを問題化する視点は見出せない。
- 29) Cholthira Satyawadha は、2000年の1月に自らが、強制移住を迫られるアカの村を訪れるきっかけになったものが、それに反対する人物からの突然のE・メールであったと以下のレポートにおいて述べている。Cholthira Satyawadha, “The Akha Struggle for Community Rights: An Internet Network Experience”, in *Tai Culture* Vol. V, No. 2. この文中で紹介されている人物は、反キリスト教の活動を行っている。例えば次を参照。<http://www.akha.org>
- 30) Lewis は、こうもりと呼ばれる者として、アヘン中毒者、教育を受けたことによって他のアカを見下し、ザンを捨てた者、シャン（タイ・ヤイ）の宗教を背負うようになった者をあげている。Lewis, Paul, *Ethnographic Note on the Akha of Burma*, Vol.1, New Haven, 1969, pp. 24-25. ちなみに、Lewis は、ビルマと中国の国境地域で、先祖への供養をおろそかにするアカを指して、「中国人をする (doing Chinese)」という表現がされていたことを述べている。Lewis, Paul, *Basic Themes in the Akha Culture*, Oregon: University of Oregon, 1973, p. 32.
- 31) 2002年4月時点。以下 A 集落にかかる事項はすべて同年同月のものとする。
- 32) 外国に出稼ぎに行っている者は男性3名で、すべて台湾である。
- 33) この点に関しては、DAPA の職員とのパーソナル・コミュニケーション及び、ツアーの紹介をする HP を参照。<http://www.dapatours.com>
- 34) Mirror Art Group の HP を参照。<http://www.bannok.com>
- 35) 一方、キリスト教へと改宗したアカも、単に「遅れ」や「古さ」からの解放としてその行為をとらえていたのではない。キリスト教へと改宗したアカの村で、村のなかでも慣習や儀礼への知識も豊富な老人は、今でも

アカの慣習への畏敬の念を抱いているが、それを維持することの困難と、それでは対応できない出来事の発生という情況から、自ら教会へと赴き、キリスト教に入信した思いを語っている。崔博憲「周辺と開発－一国民国家、文化、他者、そして位置をめぐって－」立命館大学大学院修士論文 1998年。

- 36) Clifford, James, *The Predicament of Culture; Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*, Cambridge: Harvard University Press, 1988, p. 342.
- 37) こうした問題提起においては、かつて Moerman や Keyes が展開した「ルーとは誰なのか」といったエスニック・アイデンティティを論じた研究にもかかわる。Moerman, M, "Ethnic Identification in a Complex Society: Who Are the Lue?" in *American Anthropologist* 67, 5, 1965. Keyes, C, "Who Are the Lue? Revised Identity in Lao, Thailand and China", Presented at Seminar on the State of Knowledge and Direction of Research on Tai Culture at Bangkok, 1993.
- 38) 古谷嘉章『異種混淆の近代と人類学—ラテンアメリカのコンタクト・ゾーンから』人文書院 2001年。
- 39) 土屋健治『カルティニの風景』めこん 1991年 85頁。
- 40) 土屋健治、前掲書28頁。
- 41) いうまでもなく、近代の開発はナショナリズムと重層的に連関し共犯関係にある。タイの国民化と開発の関係については、次を参照。末廣昭「アジア開発独裁論」中兼和津次（編）『近代化と構造』東京大学出版会 1994年。末廣昭「開発主義とは何か」東京大学社会学研究所（編）『開発主義』東京大学出版会 1998年。
- 42) 例えば、森林問題に関しては次を参照。Anan Ganjanapan, "The Politics of Environment in Northern Thailand: Ethnicity and Highland Development Programs" in Hirsh, Philip (ed.), *Seeing Forest for Trees: Environment and Environmentalism in Thailand*, Bangkok: Silkworm Books, 1996. Shalardchai Ramita-nondh, "Forest and Deforestation in Thailand: a Pandisciplinary Approach" in *Culture and Environment in Thailand: A Symposium of the Siam Society*, Bangkok: the Society, 1989.
- 43) Thongchai Winichakul, *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1994, p. 167.
- 44) 富山一郎「暴力の予感—「沖縄」という名前を考えるための序論」栗

原彬他（編）『越境する知2—語り・つむぎだす』 東京大学出版会2000年
180頁。

- 45) 富山一郎、前掲書181頁。
- 46) 富山一郎、前掲書191頁。
- 47) Alting von Geausau, Leo, "The Akha: Ten Years Later" in *Pacific Viewpoint*, Vol. 33: 2, 1992, P. 184.
- 48) Mato, Daniel, "On the Theory, Epistemology, and Politics of the Social Construction of 'Cultural Identities' in the Age of Globalisation: Introductory Remarks to Ongoing Debates", in *Identities: Global Studies in Culture and Power*, Vol. 3, nos.1-2, 1996, p. 70. 及びグローバル・エージェントの影響力については、次も参照。Mato, Daniel, "Global-local and Transnational local-local Relations in the Transformation of Latin American Civil Societies", paper for XXI International Congress of the Latin American Studies Association, Chicago, September 24-27, 1988.
- 49) 私にとって、ここでヒントになりうるものとして想起するのは、土屋健治が「私にとってのインドネシアを「私」という主語を用いて書こう」というものである。土屋健治、前掲書「あとがき」。

(大学院後期課程学生)

Minority encounters with development:**Toward a consideration of the sentiment 'We've had gutful of development'**

Hironori SAI

This paper focuses on what development is for minorities. This *problematique* stem from accounts related by Thai highland people, that 'we've had gutful of development'.

From the 1950s, as they were massively targeted as objects of development, Thai highland people were labeled communists, opium growers, forest destroyers, and always already were posited as entities whose problems required resolution through development.

However, the unfolding of development cannot simply be grasped in term of its successes and failures in resolving problems. Development must also be thought of as a mode of naming and comprehending others. With reference to his 'project on Other within', Thongchai Winichakul turns his attention to Othering within in the nation-state in the production of ethnographical knowledge. Such naming and comprehending of 'Other within' also take place at the site of development, which concentrates all kind of knowledge.

Not just the state, but also people who deal with development such as anthropologist and Christian missionaries, as well as NGOs and forth, accepted and act upon that site of naming and comprehending, each from their own position. The intentions and designs of people and organizations powerfully influence the relation of the Akha, highland people, to development, and positions on development of Akha who have converted to Christianity, for example, contrast with those of traditional Akha. But so long as development remains the underlying premise, then this contract can be linked to that between the two side of one coin.

For those Akha and other highland people who live amidst development, however, the site at which they become objects of naming and understanding is also the main field of struggle.

Keyword : minority development Other within